第四巻は、昭和55年10月に刊行された『親こそ最良の教師』をベースに、その3年前の52年10月に刊行された『石井式漢字教育革命』の二つの対話（漢字は心の珠を磨く道具・大脳生理学から見た幼児の漢字教育）と、全図漢字漢文教育研究会の機関誌「漢字漢文」に掲載されたドーマン博士の対談を加えたものである。

昭和52年、公文数学研究会の招きで講演したのが縁になって、この会の顧問になった頃、グリーンアロー出版社から、解りやすい石井方式の実践手引きを書いてほしいという依頼を受けた。

この頃すでに『一年生でも新聞が読める』『漢字による才能開発』の両書は絶版になっていたので、喜んで執筆した。これが『石井式漢字教育革命』である。これは、家庭の母親を対象に“やさしく出来る石井方式”の指導法を具体的に示した解説書である。

この中に、ある脳障害児が漢字学習によって快方に向っている、という実例を掲載していたため、障害児をもつ親たちから、障害児の指導だけを扱った、より具体的な解説書を出してくれないか、という投書を頂くようになった。それで、その要望に答えて刊行したのが『親こそ最良の教師』である。

この書名は、グレン・ドーマン博士の名著『親こそ最良の医師』に倣ったものである。石井方式とドーマン方式とは、その原理は全く同じである。また、具体的な指導法も全く同じだと言ってよい。だから、書名が同じ趣旨のものになっても不思議はあるまい。

さて、「言葉よりも漢字の方が覚えやすい」ということは私の発見であるが、「文字の方が言葉よりも覚えやすい」ことは、今でも私とドーマン博士以外にどれだけの人が解ってくれることだろうか。

このような事実の発見は、固定観念に執われないで言わば非常識とも言うべき実験を必要とするが、それにしても、重度の脳障害児の指導をしなかったら絶対に発見できるものではない。「教えることは学ぶことなり」だが、「重度の精薄児を教えることほど、貴重なことを教えられることはない」と思う。

私たちが容易だと思うことがむずかしくて、反対に、むずかしそうに思われることがやさしい、ということがよくある。「漢字は言葉よりも覚えやすい」ということなど、その最も良い例であろう。

「言葉の覚えられないほどの重度の精薄児に、漢字が覚えられる訳がない」と思うのは常識である。だが、真実は、その常識の方が誤っていたのである。だから、その非常識をあえてやってみる“非常識”が、教育の世界ではぜひ必要なのである。私はこの非常識を重度の脳障害児に試みることによって、彼らから「言葉よりも漢字の方が覚えやすい」という事実を教えられた。このような常識からかけ離れた事実は、彼らのほかにだれが教えてくれるであろうか。

この発見からすでに十年の月日が流れている。未だに、この事実を事実として理解できないで、精薄児たちは漢字から遠ざけられ、良くなるべき頭脳が良くなれないでいる。教育の世界はまだ天動説の時代にひたっている。いつになったら地動説が教育の世界を支配できるのであろう。本書の刊行がその迷妄を啓いてくれることを強く念願するものである。

石井　勲